

② 嘉永七年大地震の記【意識】

(表紙)

(多田家文書)

嘉永七年大地震の記

四宮氏

嘉永七年(1854)甲寅十一月四日巳時(午前10時頃)、江戸は大地震に襲われた。

【註】

※嘉永7年11月27日、改元して安政元年となる。

【中略】

相模(現・神奈川県)・伊豆(現・静岡県東部と東京都伊豆諸島)・甲斐(現・山梨県)・駿河(現・静岡県中央部)など諸国は、十一月四日江戸と同時に(午前10時頃)に大地震が発生した。

相州小田原城の櫓は大きく壊れ、城下の町や村々は大部分の家が破損した。

豆州(現・静岡県)下田は特に被害が大きかった。津浪が襲いかかり、大半の民家は海に沈んでしまった。柏木村は深さ五丈(約15^{トシ})も土地が陥没。駿州(現・静岡県中央部)富士川の水量は少なくなり、舟に乗らなくても川を渡ることができた。

【中略】

遠江（現・静岡県西部）掛川宿は四日辰時（午前8時頃）に大地震が発生した。宿駅の建物は全部倒れ、出火し、二百人ほど焼け死んだ。城の櫓や門壁などは大きく崩壊した。その夜、長さ二尺（約60センチメートル）の火の光りが空中に見え、しばらくして見えなくなつたという。

袋井宿（現・静岡県袋井市）は地震で壊れ焼失した。また、見付宿（現・静岡県磐田市）の建物は大半が潰れた。

【中略】

大坂は十一月四日辰中刻（午前7時40分〜8時20分頃）に大地震発生。人々は逃げようとして慌て騒ぎ、舟に飛び乗って家屋に押しつぶされるのを避けようとした。この時、市中で家屋が二百軒ほど倒壊し、また寺も五ヶ所倒壊した。

五日申時（午後4時頃）にも大地震が発生。また空が鳴り響き、酉時（午後6時頃）また大地震。この時に老若男女、その多くは富裕な家の家族であったが、先を争って船に乗り、川に避難して、「これで大丈夫だ。」と安心していった。

しかし西半時頃（午前7時頃）、二丈（約6尺）ほどの津浪が急に起り、九条新田から西、天保山あたりまで押し寄せ、木津川や尻無川、安治川などへ流れ込み、二千石積み以下の大小の船が津浪と一緒に川へ押し寄せ、川岸へ打ち揚げられた。まず道頓堀筋は、大黒橋まで数カ所の橋が帆柱で押し崩され、幸橋まで大小の船がその上に折り重なり、二重三重に押し詰められた。矢を射るような荒波が烈しく押し寄せ、進むことも退くことも、岸へ寄ることさえできず、船頭もどうすることもできなかつた。まして小船に乗っていた幼児や老人たちはどうしようもなく、ただ、あつと言う間に舟に水

が入り、子供や老人の区別なく泣き叫ぶ声が幾千万となくあがり、その悲しく酷い様子は言葉で言い表しがたかったという。この時、我先きにと上町を目指して走って逃げる者は数限りなく多かつたという。

真夜中にまた大地震。神社・仏寺・町屋・倉庫など多くの建物が破壊された。

赤松蜷北氏がたまたま大坂に逗留中で、翌朝見に行つてみると、小舟は全部大船の下敷きになり破壊されたか、ひっくり返つて川を塞いだか、または岸に溢れて槓で打ち込んだように街へ突つ込み、川岸に沿つた建物を押し流したそうである。

【中略】

淡路や讃岐(現・香川県)、伊予(現・愛媛県)、土佐(現・高知県)などでも大地震発生。土佐は特に被害が甚大であつた。城下に火災が起こり多くの家屋が焼失し、たくさんの人が亡くなつた。海辺では津浪が発生し、土地は崩れ沈んだ。下町で火を逃れた人も、十六日の大地震に遭遇し、津浪で家が流されて沈んだ。甲浦は高さ三丈(約9.3m)の津浪に襲われ、関や堤は毀れて沈んだ。海岸はあちこち崩れたので、国外からの入国は禁止となつた。

淡路に大地震発生。近郷の毛の井は三十軒ばかり潰れた。福良は津浪の高さが四尺(約1.2m)ほどという。

讃岐(現・香川県)と伊予(現・愛媛県)は家屋が崩壊した所もあるという。

土佐(現・高知県)は十一月四日に大地震。多くの民家が潰れ、たくさんの死者が出た。甲浦や白浜(現・高知県東洋町白浜)

の海辺は津浪が襲つてきた。甲浦かんのうらの初めの津浪は高さ一丈五尺(約4.5トイ)、次は高さ三丈(約9トイ)、三度目の津浪の高さは初めの津浪より低かったという。

この大地震により海岸沿いの道や橋が崩れ落ち、道路の通行は難むづかしくなった。土佐は四国巡礼を禁止して入国を許可しなかったので、日和佐より引き返したという。

嘉永七年(1834) 甲寅きのえとら十月二十五日に地震が発生したという。

十一月四日快晴。巳時みのとき(午前10時頃)ごろ地震発生。家にじつとしていることが出来ず、人々は外へ走り出た。屋根を見ると波のうねりのように揺れ、しばらくして止まった。

その日の亥い(午後10時頃)のころ、坤ひつじやま(南西)の方角から卯寅う(東北東)の方角を指して、幅二尺(約60センチ)ぐらいの黒白の旗雲はたぐもが空を通り過ぎた(これは清秀氏の話である)。

その真夜中、赤い雲が幾条となく北より東へ連なり、空を通り過ぎたという(これは源久寺松堂和尚の話である)。

翌五日申時さひるしやま(午後4時頃)頃、また大地震が発生。人々は急いで外に走り出て驚き騒いでいた。昨日よりも地震の規模は大きく、障子・襖ふすまなども倒れ、立てて置いた物が転がったり落ちて毀れたりした。しばらくして坤ひつじやま(南西)の方角から、空に雲もないのに遠くで大砲の弾丸が破裂したような音がどろ／＼と鳴り響き、しばらくして止まった。昨日も東の方に鳴り響いていたという。

夕暮れになって近くの町の半鐘や寺々の釣鐘つりがねなどを打ち鳴らして、「火事だ。」「火事だ。」と叫ぶ声が聞こえ、急いで出て見たけれども何処ともわからない。そのうちにまた地震が何回も起こった。いつもの火事と違って人々が駆け付けるのも遅く、私も火事の様子を見ようと新町橋しんまちばしまで行つたが、その途中、豊や薙むしろなどを敷いて避難している人や、荷造りして逃げて行く人もあり、町筋では火事場へ走る人が少ないように見えた。

新町橋のあたりは火事場より物を持ち出し、寄り集まって騒がしかった。

新し町(現・中通町付近)二丁目の小鳥屋は潰れて、火は**新し町**の東側まで燃え広がっていた。

塀裏(現・新内町・南内町の一部)へ廻ってみると、**町会所前**も焼けてしまっていた。町側の東へ延焼していったが、袖岡の屋敷は植込みがあったから少しも焼けなかった。鷹取家は夕方の地震で皆潰れてしまった。

風は東南へ吹き付け、火勢が盛んになり、そのうち**魚棚**(現・幸町2丁目と中通町1丁目の一部)の方へ延焼し、浜側の家も危なかったけれども、道と堤との間が少しあって焼けなかった。

塀裏堤の内外は、地震や火事を避けて人々が少しずつ家財物運び出し、あたり一面に場所取りをしていた。

通町一丁目の西端角の煙管屋の家が倒れ、その傍から火が出た。また**魚棚**の蕎麦屋は最初に火が出たそうである。

賀島家の土蔵が焼け、御屋敷は延焼して東南の方が少し残っていただけである。通町の火は稲田家長屋の大壁が倒れた所から移り、それより賀島家へまた移った。延焼した稲田家は**後側**が町に隣合っていて、一町(約109)余りも白壁が続き、その**軒裏**も厚く白壁で塗ってあったのだが、その**後側**の長屋も**惣倒れ**に潰れてしまった。その潰れた長屋へまた焼け移って御座敷は全焼し、東側に少し残っているだけである。

(このような町屋に近い屋敷では、冬に葉の落ちない常緑樹を植えるのが一番よいのではないかと思う。少しの植込みによって袖岡屋敷は燃えなかった。)

また紀伊国町(現・八百屋町3丁目)と中町(現・八百屋町2丁目)も家が二棟倒れ、ここからも火が出たそうである。

八百屋町(現・八百屋町1丁目)は焼けて、紙屋町(現・一番町)三丁目は七分ほど焼けてしまった。紀伊国町も同じく七分ほ

新し町(あたらしまち)

現・徳島市中通町1
〜3丁目・両国本町
1丁目。江戸期〜明治初年の町名。

塀裏(へうら)

現・新内町1〜2丁目
目・南内町1〜3丁目
目・両国本町2丁目
・幸町3丁目。江戸期は徳島城下の武家町地。

町会所

現・南内町2丁目・新内町2丁目付近。御用商人から藩が必要な物資を購入する役所。

ど焼けたが、新し町三丁目は少し焼けただけですんだ。

この時長御蔵(徳島藩の米蔵。現・徳島市文化センター付近)はもちろん新御蔵(徳島藩の米蔵。現・裁判所付近)まで火の粉が飛び危なかった。その東北の側の本町筋の森家の御屋敷の台所や納戸などに度々火が移りかかり、ついに焼けてしまった。さて地震中の火事なので、着の身着のまままで逃げた人が多い。火が燃え移るまで余裕のある場所でも家に押し潰されることを怖れて、重く大きな物は持ち出すことが出来ず、なおさら二階に揚げてある物などは、そのまま焼けてしまった物が多かった。

季節は冬であるから何処でも火を使っている。夕飯を炊く時間帯なので煮炊きしながら、また、飲み食いしながら走り出てくる人が多かった。町家の端しに遠い裏屋は一方しか出入口がない。早く出て行かないと道が通れなくなるので、仕方なくそのまま走り出た人も多いという。

家は揺られて傾き、蔵も裂けて壁が落ちてしまったので、火が移りやすく、そのうえ火消方の人たちも、いつものように消火しないので、火は好きなように燃え広がった。

紙屋町二丁目壺屋某は、家が倒れて一家七人同時に押し潰され、二人は疵を負ったけれど命は助かったそうである。男性三人と老人が一人即死し、その他の押し潰された人が、「助けてくれ。」と声かぎりに叫んでいたけれども、助けようとする人は誰もなく、ついに焼け焦げて死んだという。押し潰されて焼死するような、そんな苦しみや悲惨さを思うだけでも身の毛がよだつ。

三、四日後に焼跡を取り除いていると、稲田屋敷の長屋の大壁に押し潰された二人が溝の中で生き長らえていて、幸運にも助け出された。

(大地震で家が倒れ、器財も破損するのは自然の理である。焼けなかったら、金銀や衣類、帳簿、記録など無事に残るものは多いだろう。倒れた家でも柱や梁、板類、

長御蔵(ながおくら)

驚の門内の南側半分にあった徳島藩の米蔵。現在の徳島市文化センター敷地なし立体道路の北端あたり。

新御蔵(しんおくら)

新蔵町の西端にあった徳島藩の米蔵。士卒に支給する米麦を貯蔵。明治年間市役所になり、その後裁判所になった。

瓦などまで使えば小さな家屋を建てることができる。

たとえ家が潰れ倒れて、慌てて遠くへ立ち退く時にも、後のことを心配して火をそのままにして置くことがないように。家が倒れたら火事は起こるものと覚悟し、いろいろの火の始末を心懸けるべきである。

天保元年(1830)、京都に大地震が発生したが、火災は起こらなかった。宝暦元年(1751)の地震でも火災は起こらなかった。その時から火の用心の警戒も厳しくなったように思う。

宝永四年(1707)の阿波国の大地震の時には、火災が起こらなかったので困苦も二重にならず、また金銀・財物を灰にすることもなかった。

さて今回は、十一月五日七つ時(午後4時頃)に地震が発生した。その時、内町 魚棚(現・幸町2丁目と中通町1丁目の一部)の大西屋や、通町一、二丁の間と中町(現・八百屋町2丁目)の家が潰れて出火した。

これも家屋が崩れて一時(約2時間)ぐらいしてから、出火したのだから、油断なく火の始末をしておけば、火災はこのように大きくはならなかっただろう。

また倒れ潰れた家だから、高い梯子を用いるまでもなく、普段の火事より容易に防ぐことが出来ると語った人もある。もつともな説である。ただ地震に辟易して火災を防ぐのがなおざりになったのは、たいへん残念なことではないだろうか。

この時長御蔵はもちろん、新御蔵へも火の粉がしきりに飛び落ちて危なかった。その北本丁筋の森中大夫(中老)の御屋敷は台所や納戸などに度々火の粉が飛んで来て、少しの間に焼けてしまった。

その隣の池田上大夫(家老)の御書院は傾き 所々 破損し、蜂須賀上大夫(家老)の長屋や御座敷廻り(書院は倒壊)は全部破損してしまった。蔵や納屋なども数カ所倒れたそうである。

納戸(なんど)

衣服・調度類を納めておく室。

また仁尾家や蜂須賀家など中大夫(中老)の御屋敷の破損は大きかった。新御蔵丁(現・新蔵町)の武藤家や山田家、長坂家など中大夫の御屋敷は破損した所が多く、本丁(現・寺島本町の一部)や新御蔵丁の西尾の二家、及び前田家などは大きく破壊された。

南浜(現・中洲町)は倒れたり毀れたりした家は少なく、北の丁(現・北常三島町)の長井家は破損した。

寺島口御門台と櫓は少し毀れ、見張御番所は潰れた。福島口御門台の櫓や瓦は落ちてしまい、見張番所も同じように潰れてしまった。助任口御門台は見張番所が少し傾いただけである。

御城の櫓や塀などは瓦一枚落ちたところもなく、破損の様子は見えない。また福島町本丁筋を取り囲み一町ばかりのところは潰れてしまった。それより寺沢中大夫(中老)の屋敷は大きく破壊され、その向いの多田家も破損してしまった。

東の丁の破損は甚大で、慈光寺(福島1丁目)の書院や経蔵、鐘堂その他二家屋とも毀れてしまった。

東照寺(福島2丁目)の方丈その他全部潰れ崩れ、観音堂が一字残っているだけである。本福寺(福島2丁目)の方丈は大破し、その外に書院や庫裏なども全部毀れた。

四所明神(四所神社、現・福島2丁目)は拝殿や神職の家も全部潰れ壊れた。神殿は半壊だが、後ろの方は全く潰れもしなかった。さすが神の威光である。

その南側(現・福島2丁目付近)には、両蜂須賀家(中老)と長谷川家(中老)がある。この辺りの南北に建っている家は破損が少なく、東西に建っている家の破損は大きかったという。前述の三家(両蜂須賀家と長谷川家)も崩れ毀れ、中内家も破損した。

中ノ丁(現・福島1、2丁目)では藤川家や猪子家、下条家、榎原家、望月家、梯家、篠山家、江口家など崩れ倒れた。小林家や三宅家、山崎家、山川家、尾関家、岡島家、及び桜馬場(現・福島1丁目)では大岡家など、みんな六、七百石

本丁(ほんちょう)

現・徳島市寺島本町
東と寺島本町西の一部。

寺島口御門台

徳島橋(通町)からま
つすぐに寺島川を渡
る橋。現在は陸橋に
なっている)の内側
にあった番所。石垣
を築いて城門のよう
な構えで見付とも言
う。

東の丁

福島町の東部と思う
が不明。

以下の炮将(鉄砲頭)や騎馬士などであるが、崩れたり潰れたり破損は大きかった。

その他あちこちで破損の家はいちいち数えられないほど多い。中大夫(中老)以下諸士宅や寺などの破壊は、福島ではことさら多かった。その西浜側(現・住吉1丁目)の商店の破損は少なかつたという。

それより築地(現・新南福島1丁目付近)や大工島(現・大和町)では崩れたり傾いて破壊した民家が非常に多い。安宅は破損が少なく、沖洲は却って傷みが少ない。

住吉島では仁尾家や長谷川家、牛田家、森家、佐野家、六田家、松島家などは崩れたり潰れたり破損してしまつて、残つた長屋や門塾なども多く破損してしまつた。その他諸屋敷の破損は多い。

住吉宮(現・住吉1丁目)拝殿や神興堂、鳥居はみな崩れ潰れてしまつた。ただ神殿二座は卓然として動かなかつた。

蓮花寺(現・住吉1丁目)は方丈だけ無事で、その外は全部破損し、鐘堂は傾いてしまつた。

御材木屋(板場役所、現・住吉2丁目)の破損は大きかつた。

その他野路村(現・住吉4丁目付近)の民家は却つて傷みが少なかつた。その野路村で、宮本嘉吉という人が御供として江戸で奉公中に病死した。その知らせの手紙を泣く泣く読んでいる時に家が揺り出し、手紙を握りしめたまま庭へ走り出たが、家は潰れてしまつた。この家は十五、六年前に堅牢に建ててあるのに、それでもこのような状態である。宮本家は私の親類なので弔いに行つたが、家が潰れ砕けただけでなく、器財まで大半毀れてしまつた。

その川向い西の大岡(現・下助任町・吉野本町付近)の馬の背(現・東吉野町1丁目)という所は三、四軒潰れた。大岡本丁(現・助任本町4丁目付近)筋の二、三百石取りの諸士の家が多く潰れた。まず算えてみたところ、中野家や飯沼家、津田家、片山家、原両家など、その外にも破損した家がある。

今度の地震で潰れた旧家のうちには、宝永四年(1707)の地

騎馬士(きはし)

禄高250石以上の平士のこと。

西浜側

現・徳島市住吉1丁目。南浜側ともいう。

門塾(もんじゅく)

門の両わきにある建物。昔はここで勉強を教えた。

大岡

現・徳島市下助任町1〜5丁目・吉野本町1〜6丁目・助任本町1〜7丁目・東吉野町1〜3丁目・

震後に建てた家も多くあったということである。

山王宮(日枝神社・助任本町6丁目)の拝殿は潰れてしまった。この辺りの御鉄砲組の人の家は破損はしたけれども、潰れた家は多くない。

助任町森屋小路より北は特に被害が大きかった。森屋小路南角の一軒は潰れ、その他三、四軒は破壊した。

北手の浜側は大部分潰れ倒れた。裏町の東側は半丁ほど潰れてしまい、その向い側も多く破損した。浜側の新道は一棟潰れた。町向い角の柏木家八百石の砲将(鉄砲頭)の家は御座敷が大破し、町も大方潰れてしまった。

本町筋の庄野家や林家、佐々家、安富家、津田家、中村家、山本家、山岡家などは特に倒壊が大きく、その外に破損した家もある。また春日(春日神社、現・下助任町3丁目)の神輿台は潰れ砕けた。弘誓寺(現・下助任町2丁目)の破損は大きかった。八幡(八幡神社、現・下助任町4丁目)は、拝殿と小社も破損し、その南手の町は長さ二丁ほど、五日夕方、みんな焼けてしまった。

馬場(下助任町1丁目〜3丁目)北側の商家は二、三軒潰れた。万福寺(現・吉野本町)は方丈の外は全部潰れてしまった。

西町(現・吉野本町)の津川という大きな材木屋は、御上の御用聞をしているが、家が潰れてしまった。津川家の店の間口は、長さ十七間(約31¹/₂)に高さは軒口で三間(約5.4¹/₂)もあるが、前方へ倒れて道を塞いでしまったため、みな津川家の後ろを通行していた。

それより北前町(北前川町のことか)の裏店は数軒潰れてしまった。津川の向いは萱葦の家が連なっているが、一軒も潰れた家はない。何分津川家は広大であるから、このように潰れたのだと思われる。

それより上助任五丁ほどの間は、七分ほど潰れ倒れた。一軒は火事になったけれども早く消し止めたそうである。町端の川の前の向合せの家は無事だった。潮水が道の上へ少し乗っただけである。金子三昧庵は潰れてしまった。

上吉野町1〜3丁目
・中吉野町1〜4丁目
・中前川町1〜5丁目
丁目・北前川町1〜5丁目。

中野村(現・下助任町)までの間には少し潰れた家もある。西上助任町筋だけ被害が大きかった。

前川や出来島は所々、少しずつ破損したようである。

大津中大夫(中老)家や大屋家、伴家、青山家など浜側の家の破壊は甚大である(伴家の裏にある一軒の破損が特に大きかった。病人の親を床ごと担ぎ出して避難したが、伴家の土蔵が倒れて圧死したという。土蔵も堅固に建ててあり、簡単に崩れるものではないのに、このようになってしまった。)

また新町は大きく揺れたけれども、内町のようにには揺れなかったのか、家屋の潰れたのは表店では二棟だけである。

籠屋町の南角から紺屋町筋へぐるりと廻って、一丁たらずの間は大部分潰れてしまった。また富田町南角から紺屋町筋へ半丁ほどの間も潰れてしまった。その南角の家屋は出火したものの、すぐに消し止めた。この両方とも富田中の町(現・仲之町)通りであるから、このように倒壊したのだろうか。中の町四丁目中ほどから東は特に被害が大きかった。

これより東の方へ中園(現・中昭和町)付近は被害が大きく、商売人や職人など、雑多な人々が群れ集まって住んでおり、家並みも犬の牙のように入り組んでいて、全部で六、七町もあるだろうか、大方潰れ倒れて、残った家も破損を免がれなかった。

またその東の齋田(現・昭和町付近)という南北に連なる大きな浦では潰れた家が六十八軒、その他に倒れなかったが破損した家は数限りないほど多い。

齋田浦の東は入海になっていて、潮も普段よりは五、六尺(約1.5〜1.8)高く押し上がって来た。「それ、津浪だ。」と慌て騒いで、十丁(約1キロメートル)ほど西の勢見山へ何回も逃げ登った。その留守の間に盗みに入られた家もあるようである。

ここに松本某といつて、前の店は潰れ、居宅三棟も破損し、出入りも危なく思うほどの被害を受けた家がある。これも私の従弟の店である。潰れた家の片付けや小屋懸けなどに大変苦労していた。

齋田浦(南齋田浦)

現・昭和町5〜8丁目
・中昭和町5丁目
・南昭和町5〜7丁目
・万代町6〜7丁目。

入海(いりうみ)

陸地に入り込んだ海

勢見山(せいみやま)

眉山の一部をなし海

同じ松本という人は津浪を避けた後に、居宅は全部焼けてしまった。

これより東南へ一つの大川を隔てて津田浦がある。ここは西に山があり、三百余りの家が建ち並ぶ浦であるが、倒れた家は一軒もなく、海際であるから潮は松原まで揚ったが、民家へは入らなかつたという。

先年の地震には八幡神社(新浜本町2丁目)の馬場まで潮が来たという。この津田浦の東南より北へ高潮除けの土手が連なっている。この土手は長さが三十余丁(約3.3キロ)、高さは二丈(約6.6)ほどで、幅は五、六丁(約5.5〜6.5)もあるだろうか、今度の津浪で大部分突き崩された。この高潮除け堤がなかつたら、津田浦や沖洲は言うまでもなく、徳島の新町川筋も水が溢れ危なかつたことだろう。

津田立岩の辺りで八十石くらいのいさば船がひっくり返り、檣が船底に穴をあけたという。その他碇泊中の船のうち、津田川の上、大松川の口へ突き入れられたものもたくさんあるという。

津田の戌(西北西)の方角に山城張(現・山城町)という小村がある。民家三十軒余りのうち十軒ほどが潰れた。またその西北の北浜(現・沖浜町・南二軒屋町)も二軒潰れた。南浜(現・沖浜町)は八軒ほど崩れ潰れてしまった。北浜の潰れた家のうちの一軒は私の従弟の家である。古家ではあるが堅牢に建てて、地盤も少し高く築いてあるのに不思議なことに潰れてしまった。

これより南の近郷は大荒れの所は少なく、東富田は所々破壊した家もある。西富田も同じであるが、山の近くだからか却って少ない。

勢見山の金毘羅宮では丈七尺(約5.1)の石の大灯籠は少しの狂いもなく、その他の数十基も傾いたり毀れたりもしていない。その他の神社や寺も、勢見山の近くは破損が少ない。

佐古町は九丁目(現・佐古5番町)より西は破壊した家が多かつた。また小裏丁や大裏丁より佐古壘まで所々倒れた

島市西二軒屋町の市街地西側にある山。標高約109。山中に忌部神社・金比羅神社がある

いさば船

江戸時代、水産物や薪・炭などを運送する小廻船の一種。

大灯籠

高さ約9。天保2年(1831)藍商が寄進

家もあった。破損した家も少なくないという。

佐古町の西には国府中村(現・国府町)がある。ここは特に被害が大きく、印鑰いんやくの社やしろ(大御和神社、現・国府町府中こう)は破損し、神殿とその前の町も大部分崩れ壊れた。

それより石井近辺や麻植などは、あちこち荒れてしまった。また下寄しもより(現・川内町方面)付近や撫養下道、諸村々の新田の住民たちは津浪を恐れ、みんな西の山の方へ逃げていった。なお一人で家に残っている人もあり、錠おを下ろして出た人もあるという。

長原(現・板野郡松茂町長原)の漁夫が漁をしていたが、南方の海部沖かいふおきを雲が通り過ぎて行くような大波が行ったり来たりしているのを見て急いで帰り、すぐにも津浪が襲って来ると思っ、夜具や家具などを馬に乗せて逃げたという。その他数十村の住民たちは伝え聞いて、我先きにと逃げ去ったという。

鯛浜(現・板野郡北島町鯛浜)や馬詰(現・鳴門市大麻町中馬詰付近)近辺は、幅一丈(約3メートル)余り、長さ二丁(約218メートル)ほど地面が裂けた所もある。

(貼紙)

安政元寅年(1854)十一月五日大地震発生。
津浪騒動があった。隣りの村々や浦々の
住民は木津山へ逃げ登り、四、五日して
から普段と違った様子もなく帰って来た。

あちこち土地が裂け、裂けた所から泥水が涌きあがり、田地が水浸しになった。また、土砂が噴き出した所もある。ただ宮島や鶴島、別宮べっくなどの人は金毘羅宮を信じ安心していったという。

また撫養は潮の高いところでも、一丈四、五尺(約4.2〜4.5メートル)より大きな潮は来なかった。ひとり高島たかしまの人が舟に住民を乗せ逃げたが、七歳の児が溺れたただけだという。

岡崎は普段より海面が四、五尺(約1.2〜1.5メートル)上昇したという。淡路の福良渡海場(とかいば)は普段より海面が四尺(約1.2メートル)上昇しただけであるが、津浪を恐(こわ)がってみんな山へ逃げ登ったという。洲本では潰(つぶ)れた家は少しだけである。ただ下毛の井という一村は、洲本城下の近辺だが、村中三十軒ほど潰(つぶ)れ破損したという。

また徳島城下から二里(約7.8キロメートル)ほど南に、裕福な商家が多く、交易の盛んな小松島という所がある。

十一月五日夕方の地震の後、津浪が北町の軒下まで突っこんで来た。「それ、津浪だ。」と、人々は日の峯へ逃げ登った。倒れた家から火が出たが、消す人もなく焼けゆくままに浦中九分は焼けてしまった。西北の方の家が少し残っただけである。

祇園社(八坂神社。現・小松島市和田島町元開)や北の地藏寺(現・小松島市小松島町松島)などは焼け残った。みんな着(き)の身(み)着(ぎ)のまままで走って逃げ、家財は全部焼けてしまったので大変困った。

御上は早速小屋を建てて、粥(かゆ)を施(ほせ)し救済して下さった。その時野上屋某の家も同じく炎焼したが、火災で家を失った小松島の住民へ銀札五十目ずつ施(ほせ)した。その後播磨屋某も一人につき米五斗俵を一つずつ、小松島中の人へ施(ほせ)したという。

(この小松島は、昔より津浪の災(わざわ)いがあるとは聞いたこともない。また火災が数家に及ぶのも希(まれ)である。そうは言っても、これまで起こらなかった火災が起つたように、またどのような津浪があるかわからない。津浪の災(わざわ)いがないのは、地勢によってこのようになってきているのだろう。

小松島は、海部より十里余りも内へ入り、山岸に囲われた険(けわ)しい地にある広く平(たいら)な浦である。たとえ海部のような地でも、大里(現・海陽町大里)などは海辺に潮の揚(あ)がった痕(あと)もない。南海に臨(のぞ)んだ地にして、なおこのとお

りである。これも地勢によってこのようになっていた
だろう。

海辺で怖こわがらなくてもよいのに慌てふためいて、火を
消さずに遠くの山へ逃げ登るべきではないと思う。慌て
うろたえなければ、このような大火事にはならなかった
だろう。）

赤石村(現・小松島町赤石町)の山添いのところ、一丁ほど座
上二、三尺(約60〜90センチ)ほどの潮が入った。ここは五日夕
方より戌時(午後8時頃)までに津浪が五回来たそうである。

三ツ井利や四ツ井利も大きく崩れた。

橘浦たちばなうら(現・阿南市橘町)は、百七十七軒のうち二十二軒流
され、百三十四軒潰つぶれた。

下福井村(現・阿南市福井町)は、八十八軒のうち四軒流され、
五十四軒大破した。

阿部浦あぶら(現・美波町)は、百六十軒のうち四軒が潰つぶれ、十六
軒大破し、二人死亡した。

(この阿部浦あぶらの住民で、子供二人を家に残して徳島城下
へ出掛けた後に津浪に襲われ、十歳ほどの子供は逃げて
助かり、七歳ぐらいの子供は浪に打たれて死亡したそう
だ。)

志和岐しわぎ(現・美波町)は六軒潰つぶれた。

東由岐ひがしゆき(現・美波町)は、百七十九軒のうち百四十七軒が流
失した。大きな家は潰つぶれ、男女十五人死亡した。

西由岐にしゆき(現・美波町)は、二百八軒のうち百九十九軒流失し、
六軒潰つぶれ、被害がなかったのは三軒だけである。十六人死亡
した。波は却かえって島の方が大きかった。いさば船ほはしらの
が浪に隠れるほどである。大浪が二度来て、その後はそれほ
ど大きくはなかったという。

田井村(現・美波町)は、四十軒のうち七軒潰つぶれ、十六軒が
大破した。津浪はまずこの浦へ入り、それから引つ立てて

由岐へ入ったという(男一人死亡)。

木岐浦(現・美波町)は、二百三軒のうち百九十軒流失し、

十三軒は少し破損した。寺二ヶ所が大破し、十人死亡した

(男五人、女五人)。

木岐浦の枝村は、五十二軒のうち七軒流失し、十二軒は少し破損した。

夷浦(現・美波町恵比須浜)は、男十三人死亡した。

日和佐浦は二百七軒のうち二軒潰れ、四十二軒は海水が流れ込み、津浪が来て麦島の被害は大きかった。津浪は薬王寺の下半丁ほど前まで来たという。

灘村(現・牟岐町灘)は六十六軒のうち二十九軒流失した。

川長村(現・牟岐町川長)は四十軒のうち十六軒流失し、三軒は潰れた。

中村(現・牟岐町中村)は百二十九軒のうち三十六軒流失し、

九軒が潰れ、五軒が大破した。七十一軒に潮水が入り、男一人死亡した。

牟岐東浦は三百五十八軒のうち三百五十六軒が流失し、二軒は潮水が入り、十七人死亡した(男九人、女八人)。

西牟岐は百七十五軒全部流失し、男二人死亡した。

内妻村(現・牟岐町内妻)は三十六軒のうち十三軒潰れ、二軒流失した。

出羽島は六十八軒のうち三十一軒流失し、二十五軒が潰れ、四軒に潮水が入った。

浅川浦(現・海陽町浅川)は二百余軒全部流失し、寺三カ所大破した。男女三人が水に流されて死亡した(一説に、男二人死亡とある)。

大里(現・海陽町大里)や鞆浦(現・海陽町鞆浦)などは被害がなかった。

那佐(現・海陽町那佐)は東手の堤が崩れ、田へ潮水が入り、家は数カ所潰れた。

宍喰浦は二百八十軒のうち百三十軒流失した。百四十七軒潰れ、男女七人が水に流されて死亡した(一説に、男五人、

女三人とある)。東浜の堤は全部崩壊した。この時の津浪の高さは宝永四年(1754)の時より二尺(約90センチメートル)低いという。竹ヶ島は四十八軒のうち三十八軒が潰れたり大破したという。

○大荒れの分

穴喰浦・浅川浦・浅川村・牟岐東浦・牟岐西浦・中村・出羽島・木岐浦・西由岐浦・西由岐村・同東浦(東由岐浦のことか)

家数約二千六十一軒

内六百二十一軒 流失

六十五軒 倒壊

二十軒 ほとんど倒壊と同じ。

二百十二軒 潮水が入り傷む

百三十二軒 被害なし

○中荒れの分

川長村・灘村・内妻村・木岐村・田井村

六十七軒 流失

六軒 倒壊

二十八軒 潮水が入り傷む

百二十九軒 被害なし

○小荒れの分

久保村・鞆浦・奥浦・日和佐浦・恵比須浜・志和岐・

阿部浦

家数約千五百七十三軒

内 五軒 流失

同 六十八軒 倒壊

百七十一軒 潮水が入り傷む

六十一軒 破損

千二百六十一軒 被害なし

(記載のとおりでは
計算があわないが、
原文のとおり記載。)

右惣家数三千八百六十九軒

内千七百五軒 流失

九十七軒 倒壊

七十二軒 傷む

残り千五百二十軒 被害なし

男女溺死者 約七十五人(内四十四人男、三十一人女)。

○ 魚御分一所

十三軒

内 六軒 流失

五軒 潮水が入り傷む

一軒 大破

一軒 被害なし

○ 諸木御分一所

五軒

内 三軒 流失

一軒 潮水が入り傷む

一軒 傷む

○ 高瀬所

二軒

被害なし

○ 御米蔵

六ヶ所

内 三所 流失

一所 潮水が入り傷む

一所 倒壊

一所 被害なし

○ 御番所四軒

内

二軒

流失

二軒 潮水が入り傷む

○ 寺四十二ヶ所

内 三ヶ寺 流失

二ヶ寺 庫裏流失

八ヶ寺 潮水が入り傷いたむ

二十九寺 潮水が入り傷いたむ

○庵三十軒

内 六軒 流失

二軒 潮水が入り傷いたむ

二十二軒 被害なし

四宮氏地震筆記

【註】は徳島市市史編さん室『徳島市史別巻 地図絵図集』、平凡社『日本歴史地名大系37徳島県の地名』、角川書店『角川日本地名大辞典36徳島県』、高田豊輝編『阿波近世用語辞典』を参考にした。

★原文書は徳島県立文書館所蔵 西野多田家文書「嘉永七年大地震の記」(ニシノ00432)である。

意訳 徳島の古文書を読む会会員 谷 恵子